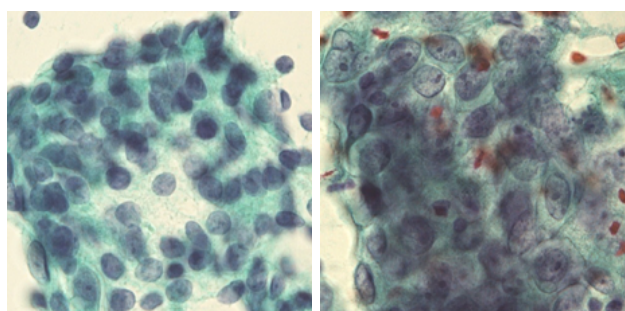


がん細胞はどっち？ ― 病理診断の話 ―



簡単なクイズをしましょう。

乳房にしこりのある二人の女性の病巣部に針を刺して細胞を採りました。どちらかが「がん細胞」でどちらかが「がん細胞でない細胞」です。あなたは分かりますか？



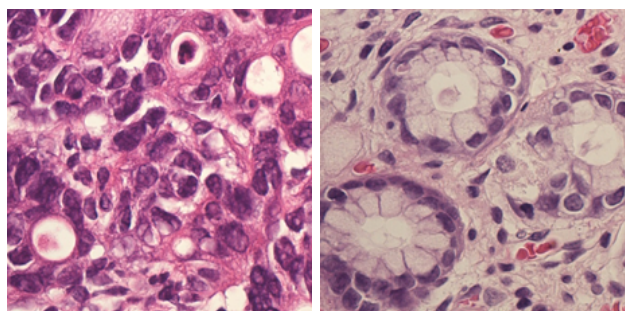
左

右

答えは右が「がん細胞」で、左が「がん細胞でない細胞」です。

さて次の問題です。

胃がもたれるとおっしゃって二人の男性が胃カメラの検査を受けました。お二人とも胃に赤い小さなへこんだ部分が見つかり、病変部の一部が検査のために採られました。どちらかが「がん細胞」でどちらかが「がん細胞でない細胞」です。あなたは分かりますか？



左

右

答えは左が「がん細胞」で、右が「がん細胞でない細胞」です。

「ああ、そういえば違うなあ」と多くの方が思われたのではないのでしょうか。どこがどう違うのかの詳しい説明はいたしません、**「がん細胞」と「がん細胞でない細胞」**は見た目にも違う特徴があるのです。

病理診断というのは身体の一部の細胞、組織を取り出して顕微鏡で観察して診断することですが、実はみなさんが今、ご覧になって体験されたようなことなのです。今回はとても分かりやすいものを例としてお見せしましたが、実際には**「がん細胞」と「がん細胞でない細胞」**は区別がなかなかつかないようなものもたくさんあります。正しい知識と長年の経験があつてはじめてこの区別がつくようになります。

このような仕事を専門にしている医師は**病理医**と呼ばれ、その中でも十分な知識と技量をもった**病理医**として日本病理学会が認定した医師が国立札幌病院には2名おります。

みなさんはCT、MRIなど画像診断についてもいろいろ聞かれたことがあるでしょう。画像診断で大丈夫だよとか、どこそこの臓器にがんがあるよ、といった説明を受けられた方もおられるでしょう。確かにその通りで画像診断での指摘は正しいのですが、厳密な意味ではがんの診断は**「がん細胞」**を顕微鏡で観察して初めて下されるべきもので、確かな本当の診断は**病理診断**によらなければなりません。

国立札幌病院のがん診療はがんの病理診断を基に進められております。がんの病理診断には**「がん細胞があるかどうか」**だけでなく、**「どういう種類のがん細胞なのか」**、**「どのような広がりをしているのか」**など治療の選択に必要なとても重要な情報が含まれます。私たち病理医はみなさまと直接お話することはありませんが、主治医、担当医を通してよりよい治療に結びつくように**「縁の下の力持ち」**として努力しております。

文責： 臨床検査科長 山城勝重